

## モロッコの水と社会変容—サレ旧市街の事例—

大島 圭子

本稿の目的はモロッコの都市社会が生活水の利用をめぐる、その管理主体がイスラーム共同体から保護領政府へ、そして独立後は国家へと大きく移行する過程で、どのように変容し、また残存したのかをサレ旧市街を事例としてとりあげ、考察することにある。

サレは、ブー・レグレグ川を挟んで首都ラバトの対岸に位置しており、その名前は古代フェニキア人が彼らの言葉で *Salā* (岩) と名づけたことに由来する。イスラーム都市サレが誕生したのは、イスラームがモロッコに広まった8～11世紀、1030年のことであり、建設以来イスラーム社会の構造と文化を色濃く持ち続けてきた。

サレの年平均降水量は500ミリメートル程度である。大西洋に面しているため、海洋からの空気に恵まれ、気候は湿潤で温暖である。11月から3月にかけては雨季となるが、その後の4月から10月までは乾季となり、雨はほとんど降らず乾燥して熱い。

サレは利用可能な水源の多様性と街の歴史の長さから、生活水の供給と利用方法がさまざまであるが、上下水道事業の管理主体の変遷という観点から時系列で3つに大別できる。まず第1に1912年以前、つまりフランスによる保護領化以前、第2にフランス保護領下の1912年から独立までの1956年、そして第3に1956年の独立以降現在までとなる。

## 1912年以前

1912年以前には、飲料水を含む生活水を得る手段は4種類あった。これらは共同水栓、水道、井戸、雨水利用である。飲料水は数10キロ離れたアイン・バルカから水路によって導水されており、この水だけが飲用に適していると考えられていた。これはサレの人々のあいだで湧水のみが飲用に適しているとされていたためであり、井戸や雨水貯留槽の水は洗濯や掃除など飲用以外の用途に使用

された。

井戸は共同で設置されていることが多く、また雨水貯留槽はその設置に広い敷地面積を必要とすることから、一般の家庭に設置されることはほとんどなかった。

アイン・バルカから導水された水はまず大モスクへと供給され、その後共同水栓や公衆浴場などの公共施設へと配水された。家庭内に専用の給水施設を有することは極めて特別なことであったため、一般の人々は各街区に設置された共同水栓を利用する以外に飲料水を得る方法がなかった。

しかしながら、共同水栓でも常に安定して水が得られたわけではなかったため、給水は質量ともに不十分であった。また、水汲みは重労働であったため、人々の中には水運搬業者を雇う者もいた。水を専門に運ぶ水運搬業者 (*ghrrab*) は共同水栓で水を汲み、大きな牛の皮で作られた黒い水入れに入れて肩からかけ、毎朝各家庭に水を運んで生計を立てており、市場監督官によって組織されていた。

彼らの多くはモロッコ南東部のタフィラルト地方出身者 (*Filali*) であり、飢えを逃れるために都市へと流入したのであった。すなわち、水専門の水運搬業者はサレにおいてはタフィラルト地方出身の人々という、外部からの労働者と対応する職業であったということになる。

水は非常に貴重であったが、水運搬業は貧しい人々が担っていたのである。人々に水を与えることは宗教的観点からみた奉仕活動であり、褒賞に値することとされていたが、彼らの報酬はわずかであった。

サレでは他の都市同様に、高密度に居住するその居住形態から、雨水と汚水の排水処理に関してもイスラーム法で細かく規定されており、汚水と尿は、それにしながって排水されていた。雨水は神の恵みであり、人々が取り合わないようするためという、汚水の処理を規定するのは正反対の理由によって、その配分が規定されていた。

このようにサレは都市生活に必要な上下水道施設を早くから備えており、その配分および排水の仕組みはイスラームの影響を強く受けたものであった。共同水栓や給水施設の建設と維持管理は市の役人の任務であり、また同時にワクフ管理人の仕事であった。彼らは給水や他の公共サービスの提供と引き換えに収入をワクフから得たのである。共同水栓の設置は、預言者ムハンマドの人々が水を共有のものとしなければならず、余分な水は独占してはならないという教えに由来している。水は神からの恵みであり、共有すべきものであるという思想のもとに人々は生活を営んでいたのである。そのため、共同水栓の水は無料で人々に供給されていた。

## フランス保護領下

第2は、フランス保護領化の始まった1912年から1956年の独立までである。1912年3月30日フェズ条約が締結され、モロッコはスペインとフランスの保護領となって独立が失われた。サレはフランスの保護領となった地域に含まれ、インフラの整備が進められた。

保護領政府は現地社会の保護および保存政策を掲げて、ヨーロッパ人居住区である新市街を旧市街の外部に建設し、モロッコ社会との空間的な分離を目的として都市開発を進めたのである。都市建設に必要なインフラ整備は新市街を中心に進められていったが、サレへの入植人口は非常に少なかったため、それ自体として開発の対象として関心を持たれることはなかった。行政首都ラバトの変容は著しいものであったが、そのためサレは保護領下においても比較的以前と変わらない構造と社会を持つ街であり続けたのである。

この時代には新市街だけでなく、旧市街の上下水道事業に関しても、統一的なシステムが導入された。そして造水事業は国家が、配水事業は地方自治体あるいは大都市では民間企業が実施するという管理主体の区別が確立したのである。造水事業に関しては、1929年に保護領産業開発公社（Régie des Exploitations Industrielles du Protectorat、略称 REIP）が設立され、配水事業は、自治体や新しく設立された民間企業が実施していた。たとえば新しく首都となったラバトでは、民間企業であるモロッコ配水会社（Société Marocaine de Dis-

tribution d'Eau、略称 SMD）が設立され配水事業を行ったが、サレにおいては事業主体は自治体であった。このようにして、保護領政府の開発計画に基づいて、各戸給水が導入が進められたのである。

これはつまり、それまでの水が共同のものであるとするイスラーム的論理とは違った個人主義、商業主義の論理に従って配水網が発展したということを示している。イスラーム教徒にとっての水は宗教的な浄化の証という大きな意味合いを持つものであったが、フランスの導入した商業主義によって有料化されることで、商売の道具になってしまったのである。この結果、各戸給水という形で、社会に個人主義が導入され、イスラーム社会の論理に基づく共同給水システムに大きな変化が生じたのである。

また、新市街の建設はモロッコ人富裕層の旧市街から新市街への流出を生じさせた。そして新市街建設当時のヨーロッパ人の新市街とモロッコ人の旧市街という、2つの異なる人種間の関係は富裕層の新市街と貧しい旧市街という新たな社会階層間の関係へと形を変え、そしてさらに旧市街内での経済格差をも生み出したのである。

このようにして、現地社会の保護を掲げて実施された保護領政策であったが、結果的には現地社会を破壊してしまった。

## 独立以降現在

第3には、1956年のフランスからの独立以降現在までである。保護領政府の導入した上下水道システムは独立以降も引き継がれ、保護領産業開発公社（REIP）は産業開発公社（REI）へと名称変更された。保護領下に導入されたシステムの一環として、配水事業は民間企業に委託する自治体が多い中で、サレは配水事業を自治体自身で実施していた。1960年代に入ると、全国規模の都市の発展にともない爆発的に水需要が増加した。そのため地表水の利用に着手するなど、事業の拡充のために大規模な投資が必要となり、配水事業を担っていた民間企業がこれに対応しきれなくなったため、造水事業同様に、配水事業も公的機関が管理運営するようになり、これらの2つの事業主体の区別は次第になくなっていった。1972年になるとかつての産業開発公社（REI）の事業を引き継ぐ

かたちで、飲料水公社(Office National de l'Eau Potable、略称 ONEP)が設立された。また1977年にはサレの配水事業もラバト同様に、ラバト—サン電気・配水公社(Régie Autonome Intercommunale de Distribution d'Eau et d'Electricité de Rabat-Salé、略称 RED)が実施することとなった。この配水公社は1999年に民営化され、その事業を引き継いで REDAL (Régie Autonome Intercommunale de Distribution d'Eau et d'Electricité et Assainissement Liquide、略称 REDAL)が設立された。

現在のサレの生活用水の供給は飲料水公社と REDAL の2つの組織が管理するシステムから構成されている。飲料水公社が取水した原水を浄水場まで送る導水と、浄水場から配水タンクなどの配水施設までの送水を管理するのに対し、REDAL は配水施設から、家庭内水道施設および共同水栓などの給水装置までの、給配水事業を管轄している。飲料水公社が生産した水道水は REDAL に売却され、配水されている。

下水道事業も REDAL によって実施されているが、下水処理場はなく、下水は未処理のままブー・レグレグ川および大西洋に放流されている。そのため、放流先の深刻な水質汚染を招いており、下水処理場の建設が緊急課題となっている。

サレにおける本格的な飲料水供給開発は1912年の保護領化の開始と同時に始まったといえる。これを契機に上下水道の歴史とイスラーム共同体論理を基盤としたモロッコ社会の論理は劇的に変化することとなった。しかし、この変化を経験しても、社会の中に残り続けているイスラーム共同体時代の遺物がある。それは公衆浴場である。内的変容としての近代化の波を受けて、その形態は多少変わりつつあるものの、公衆浴場の持つ社交の場という社会的な役割は失われていない。

近年、旧市街の家庭の多くが浴室を備えるようになり、衛生上の観点から公衆浴場を利用する必要性はさほどでもなくなった。しかしながら、公衆浴場の持つ娯楽の場としての重要性は以前と変わっていない。人々は週1回、たいてい週末に公衆浴場を利用しており、特に女性にとっての社交の場としての意義は大きく、女性達は連れ立って公衆浴場へ行き、そこで何時間も過ごしている。これは何世紀にもわたって繰り返されてきた光景であろう。これは人々のあいだで、公衆浴場が単なる衛生施設として位置付けられているのではな

いことを端的に示している。

他方、かつてイスラーム共同体の象徴であったともいえる共同水栓は衰退してしまった。今日、公共の給水施設には2種類がある。前述の共同水栓と行政当局によって近年設置された共用栓であるが、いずれの場合においても管理は REDAL が行っており、その使用料は自治体によって支払われている。

独立以降も1970年代までは、公共の水道施設は住民によって頻繁に使用されていた。しかしながら、各戸給水が普及すると衰退の一途をたどり、現在はその多くが衛生上の問題と必要性の低下を理由に廃止されてしまっている。1987年には各戸給水による水道普及率は平均して63.5パーセントであった。これはつまり、36.5パーセントの人々が家庭内に専用の給水装置を有していないということになる。これらの人々は共同水栓を利用する以外に飲料水を得る手段がなかったし、また共同水栓の水は無料であったから、家庭に水道を有していた人々の中にも共同水栓を利用する者がいた。そのため住民は行政による共同水栓の廃止に対し反対運動を行った。

利用人数が少ないことを理由に、共同水栓を廃止することによって家庭に水道を有していない人々や、水道は敷設されていても水道料金の支払い能力がないために共同水栓を利用している人々に負担を強いることはできない。

しかしながら、老朽化した共同水栓の排水管から汚水が流れ出し、交錯して敷設されている水道管の破損箇所から管内に入り込み、上水を汚染しているという現状や、利用者によって適切な維持管理が行われていないため、ゴミ捨て場にされるなど不衛生で近隣の住民が迷惑を被っているということも事実である。

以上のように、サレ旧市街の水管理主体は、1912年以前のイスラーム共同体時代のワクフによる管理から、フランス保護領化の保護領政府による統一的な管理へと移行し、造水事業と配水事業の管理主体の区別が明確に確立された。そして、独立以降はこの管理体制を引き継ぎながら、国家による水の国有化へ、さらに1999年1月1日にラバト—サン電気・配水公社 (RED) が民営化され、REDAL が設立されたことによって、業務委託された。

モロッコ都市部の抱える上下水道関連の問題は

多い。下水道に関しては、他市においても終末処理場はほとんどなく、下水は未処理のまま海や河川、あるいは地中へと直接放流・排出されているが、近年における都市人口の増大、そして生活水準の向上による水道使用量の増加に伴って生活排水の量が増大し、放流先周辺における水質汚濁や水源地近隣の土壤汚染が深刻な問題となっている。

処理すべき生活排水の量は自然の受容能力をはるかに超え、自然の浄化システムではもはや対応できない状況にある。そのため、終末処理場の建設によって環境衛生状態を改善、向上させることが急務である。しかしながら、下水道の建設や維持管理には多大な経費が必要となる。このため REDAL は新たに下水道料金の徴収を開始した。

また、2ヶ所の具体的な処理場建設計画（2013年完成目標）があがっており、下水道事業関連の予算全体の50パーセントをその計画に充当するなど下水道整備に力をいれている。

上水道に関しては、独立以来その整備を常に国策の中心に据えてきたため、都市部の平均水道普及率は1997年には83パーセントに達した。しかしながら、私設配管に対する維持管理が適切に行われていないことが原因である、水質の低下が問題になっている。

水質の管理は水源の水質保全、浄水処理過程における処理、そして浄水場から給水栓までの間の汚染や水質劣化の防止など、供給のすべての過程において目的に応じた方策が講じられて、達成可能なものである。つまり、水道事業者と利用者、双方の連携によって、はじめて統一的な水質管理が可能となるのである。

## おわりに

時系列的にモロッコ都市社会を分析することによって、サレ旧市街の上下水道システムの変遷と、現在直面している構造上の、ならびに社会的問題点を提示し、その解決策をさぐった。しかし、いまだ実地調査は不十分である。

今後は引き続きサレを研究対象地域とし、さらに上下水道に接続していない地方農村部へと広め、包括的なマクロの枠組の中に都市部と農村部を位置付けながら、地域社会と上下水道を考察する必要がある。

また、給水施設の近代化が村落社会に与えた影

響と現状についてまとめ、都市部と比較することが課題である。とくに地下水路の利用が多く見られるモロッコ南東部のタフィラルト地方を事例に取り上げ、現地の給水事情を時系列で追うとともに、地下水路の利用方法を明らかにしていきたい。